ー菊池寛生誕135年記念ー

菊池寛とはどのような人物だったのか

高松市立玉藻中学校2年5組
三 上 り ら

調べようと思ったわけ

私が生まれ住んでいる香川県高松市。その同じ香川県高松市で生まれ育った有名人の中に「文豪の大御所」である菊池寛がいます。高松市に住む小学生はたいてい菊池寛について学びます。私も小学生の頃、菊池寛記念館に校外学習で行って学んだので、だいたいのことは知っています。

でも中学生になった今、不思議に思うことがありました。貧しい家に生まれたはずなのに、なぜ東京の学校に進学できたのか。東京は物価も何もかもが高いはず！そしてなぜ作家になったのか、どのような趣味があったのか、どのような性格だったのか等、小学生の時には考えたこともなかった疑問が次々と思い浮かびました。

今年で菊池寛生誕135年。これを機に菊池寛がどのような人物だったのか、もう一度しっかり調べてみることにしました。

調べる方法

- 高松市中央図書館で本を借りて調べる
- インターネットで調べる
- 菊池寛記念館へ行って調べる
- 菊池寛ゆかりの地へ行って調べる

菊池寛年譜

西暦	和暦	年齢	
1888年	明治21年		香川県高松七番丁（現在の高松市天神前）に生まれる
1885年	明治28年	7歳	高松市四番丁尋常小学校入学 五番丁分教場（浄願寺・現在の高松中央公園内）に通学
1899年	明治32年	11歳	3月・高松市四番丁尋常小学校卒業 4月・高松市高松高等小学校入学
1903年	明治36年	15歳	3月・高松市高松高等小学校卒業 4月・香川県立高松中学校 （現在の香川県立高松高等学校）入学
1904年	明治37年	16歳	「中学にやるような金は全然ない」という父の命で、香川県立師範学校を受験したが、落第した。
1905年	明治38年	17歳	高松市に初めて図書館ができ熱心に通うようになる。第一号の入場券を買う。図書館にある興味がある本をほぼ読む
1907年	明治40年	19歳	3月（中学5年生）東京の新聞へ応募した作文が入選し、東京見物に招待される。初めて東京へ行く。
1908年	明治41年	20歳	3月・香川県立高松中学校卒業 東京高等師範学校予科に推薦入学　東京生活開始
1909年	明治42年	21歳	夏休み中・東京高等師範学校を除籍になる 9月・明治大学法科に入学　→　3か月で退学 11月・高松市内町の高橋清六と養子縁組する
1910年	明治43年	22歳	1月・正則英語学校の夜学に通う 3月・早稲田大学高等師範部に籍を置く （徴兵猶予のため） 6月・文学志望が養父に知れて高橋清六と協議離縁 7月・早稲田大学を退学 9月・第一高等学校（現在の東京大学）第一部乙類 （文科）入学
1913年	大正2年	25歳	4月・親友佐野文夫の盗品マント質入れの事件の罪をかぶり（マント事件）退校願いを出し3か月後に退学 9月・第一高等学校同級生成瀬正一の父の援助で京都帝国大学英文科専科に入学 草田杜太郎の筆名で戯曲「玉村吉弥の死」等発表 この年、京都・出町橋（現・上京区）の理髪店床春の主人について将棋を覚えた
1914年	大正3年	26歳	芥川龍之介、久米正雄、成瀬正一、松岡譲、山本有三、豊岡輿志雄、土屋文明らが同人雑誌第三次「新思潮」を創刊。誘われて同人になる
1916年	大正5年	28歳	第四次「新思潮」発刊。戯曲「屋上の狂人」等発表 京都帝国大学卒業。上京して成瀬家に寄宿。夏目漱石の木曜会に芥川、聞く目、成瀬らと出席する。 成瀬家の縁故で時事新報社に入社して社会部記者となる 給料は25円。月々10円を故郷の母に送る。

西暦	和暦	年齢	
1917年	大正6年	29歳	戯曲「父帰る」等発表 4月・旧高松藩士奥村五郎の次女包子（かねこ）と結婚成瀬家を出て、麻布笄町28番地（現在の港区西麻布）、画家の川西呉城宅の2階を借りて新婚生活を始める 11月・小石川区武島町21番地（現在の文京区水道２丁目）裁縫師三須方の六畳2間を借りて移る
1918年	大正7年	30歳	長女瑠美子誕生。牛込榎町（現在の新宿区榎町）に初めて一戸を構えた後、小石川富坂（現在の文京区小石川2丁目）に移転 「無名作家の日記」「忠直卿行状記」等発表 文壇での地位を確立
1919年	大正8年	31歳	「恩讐の彼方に」発表 時事新報社を退社。芥川龍之介とともに大阪毎日新聞の客員になる。 4月・小石川中富坂町（現在文京区）に転居する。小説「藤十郎の恋」を大阪毎日新聞の夕刊に連載 5月・芥川龍之介とともに長崎へ旅行する 10月・「藤十郎の恋」が中村鴈治郎一座により大阪浪花座で上映
1920年	大正9年	32歳	「真珠婦人」の連載（大阪毎日新聞・東京日日新聞）が大評判になり、人気作家になる 戯曲「父帰る」が市川猿之助らにより上演
1923年	大正12年	35歳	1月・文藝春秋社を創設。雑誌「文藝春秋」創刊（28ページ、3000部、定価10銭、発行編集人兼印刷人菊池寛。発売人春陽堂）芥川龍之介、川端康成、横光利一らが寄稿。3日で売り切れる。 母カツ死去。 10月・長男英樹誕生。市外田畑523番地（現在の北区田端で田畑5丁目）室生犀星宅に移る 12月・市外高田雑司ケ谷金山339番地（豊島区雑司ヶ谷1丁目）に移る
1924年	大正13年	36歳	1月・芥川龍之介とともに「新小説」（春陽堂）の編集を委託されて顧問になる。 11月・最初の狭心症の発作に襲われる 12月・映画「恩讐の彼方に」が公開 この年、市川左団次、市川猿之助、澤田正二郎らによっていくつもの戯曲上演。 大正13年度の文士長者番付によれば、菊池寛の年収は7500円で第2位だった。（1位は徳富蘇峰）
1925年	大正14年	37歳	4月・将棋2段になる 6月・次女ナナ子誕生
1926年	大正15年 昭和元年	38歳	文芸家協会を組織する。「文藝春秋」は春陽堂の手を離れ独立。文藝春秋社を麹町区下6番丁10番地（現・千代田区6番丁）有島武郎所有の邸宅に移る。 父・武修死去。報知新聞社の客員となる

西暦	和暦	年齢	
1927年	昭和2年	39歳	徳富蘇峰をゲストに迎えて「文藝春秋」初の誌上座談会を開く 芥川龍之介死去
1928年	昭和3年	40歳	日本最初の衆議院議員普通選挙に東京府第一区から社会民衆党公認として立候補。5682票を得たが定員5人中7位で落選。文藝春秋社を株式会社に組織変更して、取締役社長になる。
1929年	昭和4年	41歳	日本麻雀連盟初代総裁に選ばれる
1934年	陽和9年	46歳	直木三十五死去
1935年	昭和10年	47歳	芥川龍之介賞・直木三十五賞を創設 日本映画協会理事になる
1936年	昭和11年	48歳	成瀬正一死去 文芸家協会初代会長になる
1937年	昭和12年	49歳	小石川区から東京市会議員に当選 雑司ヶ谷1丁目392番地（現・雑司ヶ谷）に新築移転する 菊池寛賞を創設
1938年	昭和13年	50歳	長女瑠美子結婚 日本文学振興会を創設。初代理事長になる 内閣情報部の命で佐藤春夫、吉川英治、吉屋信子ら作家21名と大陸の揚子江作戦を視察
1939年	昭和14年	51歳	南京・徐州方面を取材旅行 第一回菊池寛賞は徳田秋声「文藝春秋」に発表 大日本著作権保護同盟会長になる
1940年	昭和15年	52歳	文芸銃後運動の講演で朝鮮、満州へ行く 高松の母校四番丁小学校で教育訓話、運動場拡張費を寄付 文芸銃後運動の講演で台湾、沖縄へ行く
1943年	昭和18年	55歳	将棋連盟より将棋4段位を授与される 大日本映画（大映）株式会社社長に就任 満州文藝春秋社を新京市に創立し社長になる
1945年	昭和20年	57歳	敗戦。 日本将棋連盟から将棋5段を許される 長男英樹結婚、次女ナナ子結婚 日本文芸家協会創立総会が開催、会長になる
1946年	昭和21年	58歳	用紙等物資不足のため文藝春秋社解散
1947年	昭和22年	59歳	GHQから公職追放の指令を受ける 大映社長辞任
1948年	昭和23年	59歳没	胃腸疾患のため自宅で療養　→　病が軽快 主治医や親友、近親者を招いて全快祝いし、好物の寿司などを食べ、2階へ上がったとたん狭心症を起こし死去

生い立ち

生家

香川郡高松七番丁六番戸の一（現在の香川県高松市天神前四）にて父・武修（たけなが）、母カツの四男として誕生。寛（ひろし）と命名。兄３人姉２人妹1人おり、7人兄弟の６人目の子どもである。「かん」と呼ぶのは友人や作家としての呼び名。

菊池家は先祖代々高松藩に学問でつかえた藩儒（藩主に仕えた儒学者）の家柄で、祖先の一人に有名な幕末の漢詩人・菊池五山がいた。

「番丁(ばんちょう)」は元武士の居住区域で禄高(ろくだか)（与えられるお給料のようなもの）と役職によって家の大きさが決められており、代々高松藩の藩儒としてつかえていた寛の家もここにあった。幕末の面影は明治になってもたいして変わらなかったが、内町(うちまち)に郵便局、警察署、裁判所など役所ができ、まもなく市制も施行されようとしていたが、そうした新時代の流れの中で、父武修は廃藩置県の変革により俸禄を失い、三豊郡仁尾(にお)町の豪商であった母カツの家も維新の混乱によって没落した。

よって寛が生まれた時には、すでに明治の廃藩置県の変革にあっており、ただの貧しい没落士族の家で、父・武修は漢詩人どころか、小学校の世話係（庶務係）を勤めて月給8円だった。（当時（明治25年）米１５０キロが7円だったそう）ただ貧しいと言っても藩儒であったから屋敷は200坪（660平方メートル）あり、他に十石(1500キロ)ぐらいとれる田地があった。米が2か月に１俵ほど送られてきたそう。しかし士族の格式を保つには家計は楽ではなかった。

父　武修
(たけなが)

父は鼻筋の通った武士らしい立派な顔立ちだったが、善人で律気そのもの。変動の時代にあって世俗と交わる才覚には欠けていた。五山の先祖に持つことを誇りにし、画数の多い漢字を好んで書いていた。

母は（寛が言うには）背も小さく美しい女性ではなかった。しかし賢い母だった。黙々たる慈母で善良で子どもに甘く、忍苦欠乏に耐えて貧乏世帯を切りもりした。後の寛の芝居好きは母方の影響を受けている。仁尾に近い琴平に芝居小屋（旧金毘羅大芝居金丸座）があり、母は昔見たその芝居の内容をかなり詳しく子供時代の寛に語って聞かせたといわれている。

母　カツ

子ども時代

貧乏はつらい

明治28年（1895年）寛は高松市の四番丁尋常小学校に入学する。父方の血を引いたのか、まだ小さいうちから読書に興味を示す。12歳の時、高等小学校に入学。しかし菊池家は困窮を極め、教科書が買えないために友人から借りて写す、修学旅行も行かせてもらえないなど、寛は子どもながらに貧乏の苦労を嫌というほど味わった。当時中学に行くためには尋常小学校を4年、高等小学校を2年行けば受験資格を得られた。だが父は寛を金のかからない高等小学校4年まで進ませた。

子ども時代の寛

もず狩り名人

楽しみにしていたのがトンボ狩り、魚釣り、もず狩りなどで、活発で活動的な子どもだった。この経験からか「父帰る」の作中に「おたあさん、今日浄願寺の椋（むく）の気で百舌（もず）が啼（な）いとりましたよ」がセリフがある。

もずは、おとりにするのを一匹買う。一本の糸を両方の目の下まぶたに針で通して頭の上で結ぶ。目を見えないようにして撞木（しゅもく・T字型の棒）にとまらせ、一度は水に落として恐怖心を与えると、もずは決して騒ごうとせず止まっているそうである。それとトリモチを付けた竿を持って、早朝か夕方郊外へ出ていくのであった。もずを見つけると気のないところを選んで撞木を立て、おとりをびっくりさせて鳴かせて、身を隠す。鳴き声を聞いたもずは縄張りに入ってきたおとりを襲うが、おとりがあっけなく落ちるので、あわててモチ竿に止まる仕組みだ。寛は十羽見つければ、6，7羽は捕まえた。友人から「百舌の博士」といわれていた。

どうやって狩るのかと思ったら、想像以上に残酷な方法！
確かに発想はすごいけれど
今は絶対にやってはダメ！
そもそも現在野生の鳥を許可なく捕獲したり飼ったりするのもダメです！

「マイナス」という万引きをしてなぐられる

寛が13歳の高等小学校2年生の時、香川という友人から「マイナス」と称した万引きを教えられる。宮崎という大きな書店で、「日清戦争実記」という本を着物の膝の下に隠して、香川に報告に行くと大胆さを褒めてくれた。それが非常に面白い冒険的な遊びに思われ、近所の遊び仲間にも教えた。しかしばれないはずがなかっ

仲間一同は先生に呼び出され筆と紙にやったことを自白させられた。学校の玄関に並んで立っていると、その学校に勤めていた父は火のように怒って、続けさまに寛を打擲（ちょうちゃく・人を拳や棒で打ちたたくこと、なぐること）した。4，5日謹慎させられたが、罰はそれだけでは終わらなかった。先生の寛を見る目が変わっていた。進級しても先生に侮蔑の目で見られた。

そうした結果、青年時代を通じて「盗み」ということを人並み以上に恐れて過ごした。嫌疑がかかることさえ恐ろしかった。

万引きは犯罪です。絶対にしてはいけません！

高松中学校時代

（現在の香川県立高松高等学校）

勉強に目覚める

明治36年（1903年）寛は香川県立高松中学校に入学。寛は勉強ができた。だが、もともと持っていた悪戯好きな性格と、図画や習字の成績が悪かったため、中学3年までの寛の成績は全校100人で10番から15番程度だったという。

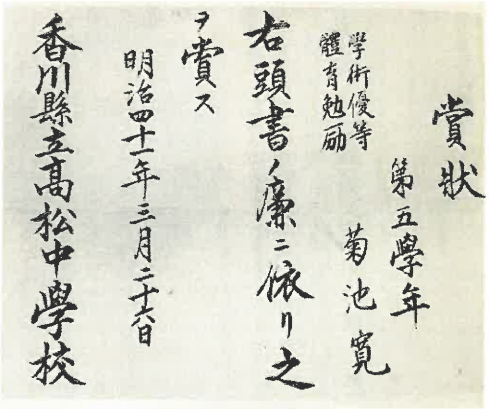
特に英語、国語、そして歴史は誰よりも劣らないいい点を取った。特に英語は抜群で、中学3年までも間に辞書に載っている英単語はほとんど暗記してしまい、英会話の時間には外国人教師と対等に話ができるほどであった。

しかし先生たちの評判はあまりよくなく、成績がよいのにもかかわらず落第するという噂が本人の耳に届いたこともあった。そんなとき寛は持ち前の負けん気で不得意科目を克服しようと努力した。その結果、中学4年のときには全校で首席になった。

「首席になったのに気をよくしたと見え、その頃私はよく勉強した。」と本人が書いてあるように、教師にも「菊池はやればよくできる」という印象を強く与えることに成功した。この経験から、寛は自信というものを持った。

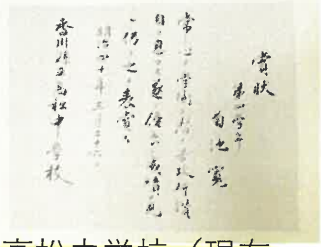
「中学時代にいい成績をとっておくこと、自分自身が自信を持ち得ることが、生涯を通じて、得になることだ。」

高松中学校時代の寛



賞状
第五學年
菊池寛
學術優等
體育勉励
右頭書ノ廉ニ依リ之ヲ賞ス
明治四十一年三月二十六日
香川縣立高松中學校

高松中学校4年、5年生の時の賞状。「学術優等・体育勉励」と書いてあります。すごい！



高松中学校（現在の香川県立高松高等学校・場所は香川県立高松工芸高校）
想像よりモダンな建物でおしゃれ！

容姿に対する悩み

寛は幼年時代は瞳が輝いた可愛い子どもだったという思いでがある。しかし童顔から青年の顔に変わる14，15歳になるころから可愛さが消えて、醜男（ぶおとこ）なのではないかと気にしていた。そんなとき父は、「お前ぐらいおとなびた変な顔をしている奴はいない」と言ったのでショックであった。そして自分は容貌は醜いと思い込んでしまった。家の貧困に合わせて容貌のこともあり、容貌のことは長く寛のコンプレックスになった。

中学時代のあだ名は「たどん」だった。（【炭団】木炭や石炭の粉を布海苔ふのりでボール状に固めた燃料のことで、色黒で目鼻立ちがはっきりしない顔立ちを「炭団に目鼻」と表現する）

同級生の話によると「背が低く、ずんぐりと肥っていたので、転ばせばころころと転がるだろうという意味ではあるが、それよりも風呂には入らぬのか、入っても洗わないのか、いつもからだが薄黒く汚れていたことにも由来していた」

父親も同級生もひどすぎる！

図書館は宝の山

図書館との出会い

「私の中学時代に、もっともありがたいことは高松に図書館ができたことである。これは実に嬉しいことである。多分明治三十九年に二月開館だったと思うから、私が三年生の二月である。私は四年生と五年生と図書館に通うことができたのである。この図書館の一か月券の第一号は私が買ったのであるが、そのとき月五銭であった。ちょうど中学と私の家との途中にあったのだから、私は一日として図書館に通わないことはなかった。蔵書は二万余冊だったが、その中で少しでも興味のあるものはみんな借りたといってもよかった。私は半生を学校へ通うよりはもっと熱心に図書館へ通った男であるが、最初の習慣は郷里から始まったわけである。」

当時は図書館を利用するのにお金がかかっていたことに驚き！現在の無料利用できる制度に感謝！

この寛の文にある通り、1905年（明治38年）2月、家に近い七番丁に香川県教育会が、高松に初めて図書館を創設した。そして言葉通り学生時代の彼は「図書館の虫」であった。それは貧しい学生としての寛の宿命でもあった。そして中学卒業するまでの2年間に自分の読める歴史や文学関係等、小説という小説はほとんど読破してしまった。

その後卒業東京へ出た翌日には上野図書館に行き、その無尽蔵（いくら取ってもなくならないこと）と見える蔵書に歓声をあげた。西鶴全集を読みたいと念願したが、上野図書館では「禁閲覧」であったが、早稲田大学の図書館で手にすることができて嬉し涙をこぼしたほどだった。京都大学時代はひとり図書館で勉学した。図書館は寛にとって宝の山であった。

初めての東京

こうした読書欲が発表欲にもつながり、寛は中学4年生と5年生のときに続けて2つの懸賞作文に入選するという文才を発揮した。最初は東京の「讃岐学生会雑誌」の募集した作文に「こんどの日曜」と題して応募したもので2等に入選した。

もうひとつの入選は「日本新聞」が明治40年に東京で開かれた博覧会を記念して募集した「博覧会」という題の懸賞作文である。入選した寛は、全国からの入選者とともに東京見物に招待され、博覧会のほか帝国大学、慶応義塾大学、早稲田大学を参観した。

「両方とも茶菓の饗応（きょうおう・もてなし）をしてくれたが、早稲田がおせんべいか何かだったのに対し、慶応は私としては生まれて初めてである洋菓子を出してくれたので、たいへんおいしく思ったことを今でも覚えている。」

また上野の青陽楼で、西洋料理を（ロールキャベツ等）味わったり、慶応の学生の都会的に洗練されたスタイルを見て羨望したりと、寛にとって生まれて初めて見る東京は、強烈な印象を残した。

貧しくて修学旅行も行けなかった寛が、自分の実力で東京旅行をしていてすごい！東京は現代の私でも、ファッションや食べ物は憧れです。寛の気持ちがよくわかる！

東京高等師範学校～明治大学～早稲田大学

気が進まないが推薦入学で上京

明治41年（1908年2月）3月、高松中学校を卒業した寛は、高等学校へ進んで大学へ行きたかった。それは東京か京都に出て、6年かけて勉強することである。自分の家にその学資がないのはわかりきっていた。

その年の秋に東京高等師範学校は、優等生を学校長の推薦で入学させる制度を発表した。この学校は国が中等学校の教師を養成する目的で設置した学校で、授業料はいらない上に、給料制度の特典もあった。寛は学校としては気にいらなかったが、学資がいらないということでは注目していた学校だったので、応募してみると入学を許可された。

東京高等師範学校時代の寛

やけ気味な態度が続き除名される

寛にとって高等師範学校はもともと気乗りしないまま入ってしまった学校なうえに、目的が善良な教育者の養成する学校であるから、文部省の統制が行き届き、すべてに厳格であったため、寛の性格には合わなかった。そして寛は教科書を買わず教科書を持たずに教室に出た。芝居を見るなどよくないとされていたが、学校を休んでは好きな左団次という役者の芝居見物に出かけていった。それに得意の英語は発音が悪いと「乙」の評定（「甲」より悪い評定）を受けたとき、かなりの親友だった人に「菊池は、英語は乙じゃないか。それで自慢をするからな」と陰口を言われているのを聞き、心が傷ついた。そんな生活が1年3か月続いた。

ある日、歴史の講義を出ると、ノートを忘れているのに気づいて寄宿舎に戻った。引き返す途中、顔見知りの物がテニスをしていた。初夏の天気の良い午後であったので、つい仲間に入ってテニスをして、授業のことはすっかり忘れてしまった。およそ2時間ほどテニスに熱中していると、いつの間にか寄宿舎の舎監も兼ねていた歴史の教師がにらんでいた。その夜呼ばれたとき、「頭が痛くて休んだが、テニスをすればなおると思った。」と屁理屈を言った。夏休みで帰郷していた寛を追いかけるように、除名の通知が届いた。

学校遍歴して養父から離縁される

寛の立てた新しい方針は、なるべく短期間に身を立てることだった。そのためには法律を学んで弁護士か司法官の試験に受かることだと方針を変えた。それなら養子にして学資をだそうというという老人が現れた。寛の伯母にあたる人が40歳近くになって結婚した相手で、当時50歳を少しこえたくらいの老人だった。その話にのって再び上京した。寛は明治大学の法科に入学し、法律の勉学を始めた。ところが法律そのものが寛にとって興味のない学問であったため、3か月もたたないうちに学校にも出なくなってしまった。かわって寛の心を満たしたのは文学だった。教職も合わない、法律家も合わない。同級生に比べれば4年も遅れたのだから、6年はかかるが念願の一高文科を受け、大学に行くこと、と決心した。正規の夜学で英語を、昼は図書館へ通い入試の準備をした。その後徴兵猶予のきく早稲田大学に入学した。ところがこれから6年もかかると知った養父から離縁された。学費の道は絶たれたが、意外にも実家の父や長兄は賛成してくれた。

青春謳歌の一高生活

あこがれの一高に合格

東京にある第一高等学校（現在の東京大学教養課程）の入学試験を受け、明治43年（1910年）見事に合格する。百何十人中3，4番という好成績であった。学資は実家を頼るほかなかったが父や兄は今度は賛成してくれ、家から月に12円送ってもらい、寮費に1円、食費に6円の出費であった。それだけ家の借金を増やすことなのだが、思いのほか寛の一高入学を喜んでくれた。

第一高等学校時代の寛

かけがえのない友人たちとの出会い

一高式のおおらかな自由奔放と、貧乏を気にかけない「享楽生活」があり、寛は初めて充実した青春を謳歌する日々を迎えた。そして何よりも意気盛んな天下の俊秀とめぐりあった意義は大きく、これからの人生を決定する友人と知り合う。その中には、後に文壇で活躍する芥川龍之介をはじめ、久米正雄、恒藤恭、佐野文夫、松岡譲、成瀬正一、土屋文明、山本有三などがいた。

左から久米正雄、松岡譲、芥川龍之介、成瀬正一

青春を謳歌

授業日の3分の1までは休んでいい決まりの中で計算しながらおでんやカツレツを食べ歩いたり、活動写真（映画）や芝居を見に行ったりした。お金がなくなると教科書や辞書を質にいれて制服も持っておらず、試験のときだけノートを借りてすませた。ただ、でたらめのような学生生活に見えて、洗練された教養やオ気の中で友人たちと刺激し合って内面の生活を充実させていた。寛も成績は2番、上野図書館通いも続け、寛の文学的成長にとても重要な準備期間となった。

学校を休んで芝居に行ったり教科書を持って行かなかったりと、やっていることは師範学校と同じなのに、こんなにも寛が友達といきいきと楽しそうなのをみると、進学する学校にも自分に「合う、合わない」があるんだなと強く感じました。そして芥川龍之介、かっこいい！

マント事件

友人の罪をかぶり退学

卒業を3か月後に控えた大正2年の4月の始め、寛は佐野文夫と2人で寮にいた。お金が無かった2人はあれこれ考え、佐野が黒田という同県人の大学生から借りてきたマントを指し、それを質入れしようと提案した。当時は普段から拾ってきた辞書を売ってお金にしたり、自分の布団を質に入れたりしていたのでめずらしい話ではなかった。それに寛は黒田が、佐野の親しい先輩であることを知っていたから、その提案に賛成し、寛は自分から質屋に行ってお金にかえてきた。

ところが北寮（寛たちは南寮）の1年生の部屋からマント盗難の届けが出されており、その調査が進められていたのである。そこへ寛が普段着たことのないマントを着て校門を出ていくのを目撃されていたので、すぐに疑われ、質屋も調べられていた。

寛は寮務室に呼び出された。寛は佐野が借りたものだと言い、佐野を呼び出したが、出かけていて夜11時頃になっても帰って来なかった。佐野が来て証言してくれればすぐに疑いが晴れると思っていた。しかし、待っている間、先生の話を聞いているうちに、マントが北寮で盗まれたもので間違いないことがわかってきた。寛は佐野が寮務室に呼ばれる前に佐野と会い、彼が本当にやったとしたならなんとかいい考えはないか打ち合わせしたかったので、「とにかく僕がしたことにしましょう」と言いいったん外に出て学校前の電車の停留所で夜中12時過ぎまで佐野を待った。

帰ってきた佐野に真相を問いただして「一緒に行って弁解してくれ」というと、みるみる顔色を変え「どうしよう、どうしよう」と悲鳴をあげて泣き出した。彼の父は山口県で教育界に職があり、また保証人が父の同期である東京大学文科大学学長であった。自分だけでなく父親もその職にいられなくなると佐野は寛に訴えた。寛は佐野が自ら行くと言わない以上、彼を無理に寮務室へやらせる気持ちになれなかった。

佐野のその後

こうして寛は罪をかぶり一高を退学し、佐野は一高を卒業後、東京帝国大学文科大学哲学科に進むが、その後の2人の運命は大きく逆転した。

先天的に盗癖のあった佐野は、大学2年のときに研究室の書籍を盗み出すという事件を起こして退学となる。その後は国学院教師、満鉄調査課図書館、外務省情報部などに勤務し、この間社会主義思想に接近する。大正11年「無産階級」を創刊し、12年共産党に入党し書記長などを歴任する。昭和3年の3.15事件で検挙され、昭和5年に保釈されたが間もなく38歳で死去した。

京都帝国大学に進学

成瀬家に救われて

血のにじむような家からの学費に支えられて過ごした一高での3年近くの年月がまたまた無になるばかりか、今度は窃盗という汚名まで着せられてしまった。しかしこの危機を**友人の成瀬正一とその家族が救ってくれた**。

成瀬正一は寛と同じ故郷、香川県木田郡出身で、当時十五銀行の副頭取、横浜正金銀行の重役であった父親の成瀬正恭に、寛の退学の事情など一切語らず、「菊池は学費がないためによした」とだけ言って助けを求めた。すると**父親は快く息子の願いを聞き入れ**、当時東京芝白金三光町に3000坪の広さがある**自宅に住まわせ**、寛の部屋を建て増しまでしてくれた。そして**将来の学費の面倒もみてくれるという約束をしてくれた**のである。成瀬の母親である**成瀬峰子夫人も本当に親切**で、弟妹も寛になついた。この成瀬一家は一生の恩人となった。そうして寛は京都帝国大学に進学した。

成瀬家からは就職にも結婚にも、結婚後も温かい庇護を受ける。就職が決まると洋服を譲られ、結婚には夫人が式服を作ってくれたり、結婚費用をくれたり**実の子と変わらぬ愛情をかけてくれた**。成瀬夫人が亡くなったときのことや、三回忌に成瀬夫人への感謝の気持ちを「大島が出来る話」「至誠院夫人の面影」で作品にしている。

冤罪がなかったとしても、大学には貧しさのため進学できなかったはず。（寛もそう書いていた）友人成瀬くんと成瀬ファミリーはなんて素晴らしい人たち！と同時に、寛がどれだけ友人に恵まれ、信頼されていたかがわかります。

成瀬夫人と成瀬正一

旧友との再会と将棋

京都でのさみしい生活の中でのなぐさめは、将棋であった。京都大学には**高松中学校で遊び仲間であった綾部健太郎**がいた。二人は久しぶりに将棋をさして寛は負けた。どうにかして勝ちたいと研究を始め、出町橋の佐野春松という床屋の人に習った。**将棋好きの寛はここで生まれた**。綾部健太郎はのちに**政治家**になり戦後運輸大臣になり衆議院議員議長にまでなる。

綾部健太郎（右）と京都帝国大学卒業記念

京都でのくらし

さみしい京都生活の中で

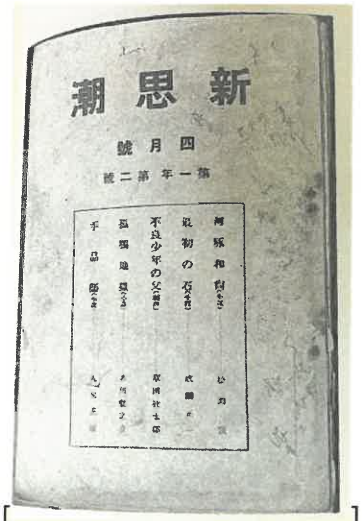
京都帝国大学英文科に進んだ寛だったが、多くの友人と別れたのと、文芸に興味がある同級生はおらず孤独に苦しんだ。寛は研究室や図書館に入り浸って様々な書物を読みあさった。その頃から雑誌や新聞に、賞金目的で批評や小説を応募し入選、賞金を獲得している。ちょうどその頃結婚した妹に25円を送ってやっている。

「新思潮（しんしちょう）」の同人になる

東京帝国大学にいた久米、芥川、松岡の3人は夏目漱石の家で開かれる「木曜会」に参加し始め、強い感化を受け、文学への激しい闘志を燃やしていた。成瀬も漱石の崇拝者であった。のちに寛も「木曜会」に参加している。
そして京都に来た翌年、文芸雑誌第三次「新思潮」が出ることになった。、芥川、久米、松岡、成瀬ら東京から同人になれと声がかかる。忘れずに声をかえてくれた彼らの友情に深く感激した。戯曲「玉村吉弥の死」を発表し文壇デビューとなる。

＜同人＞
とは同じ趣味・志を持っている個人または団体。

＜同人誌＞
とは同人（同好の士）が資金を出して、自ら執筆・編集・発行を行う雑誌のこと。



「新思潮」

寛は「草田杜太郎」のペンネームで「玉村吉弥の死」「暴徒の子」「不良少年の父」「屋上の狂人」を発表し、その後「屋上の狂人」から本名の菊池寛の名前で発表した。

就職そして結婚

記者時代

時事新報時代の寛

大学を卒業し上京したが、やはり成瀬家を頼り住まわせてもらった。作家として生活できる見込みがなかったため、就職も探したが見つからず、成瀬家の紹介で「時事新報」という新聞社に入社した。社会部の記者になった。月給は29円。毎月10円を実家へ送金した。

社会部の訪問記者の仕事は、各界の多くの人々に会って話を聞くこと。これが寛は苦手だった。電話の応対も苦手だった。夏目漱石の死を取材したこともあった。寛は怠けることなく真面目に勤務した。記事を書くのは早く、的確に事件の核心をとらえ、わかりやすい文章だった。こうしてジャーナリストとして成長していった。

これらの体験は、他の作家たちには無いもので、寛の社会的視野を広げ、また事件の問題点の発見、次の展開を見通した対応の大切さを教えた。

写真を見ただけで結婚

高松女学校時代の
奥村包子

時事新報の給料だけでは食べていけない寛が考えたこと、それは財産家の娘と結婚することだった。寛はこの考えを実家に伝えると、さっそく5，6人の候補があった。寛は秀才だという昔の評判がいきていた。その中に一定の金額を月々送金してくれるうえに、将来まとまった金を出そうという女性を選んだ。

高松藩の旧藩士奥村五郎の次女包子（かねこ）だった。どんな顔か写真を見るなり彼女に決めた。その美しい顔に高貴な雰囲気が漂っていたからである。寛がお金に不自由しなくなったころ、「私の妻はそういう持参金などよりも、もっと高貴なものを持っている女だった。私の結婚は私の生涯に於いて成功したものの一つである」や、もう一度結婚するとしたらどんな女性かという質問に「現在の妻だよ」と答えている。

最初はお金目的での結婚だったかもしれないけれど、すべてにおいて妻に感謝しているのがわかります。

めざましく文壇へ

仕事に執筆に頑張る新婚時代

寛の新婚生活は川端呉城という画家の2階から始まった。急な結婚であったが、新しい生活が優しさや愛を次第に育てていった。長く渇望した異性の愛に包まれたよろこびと家庭の幸福にひたった。

翌年長女瑠美子が生まれる。寛は「子どもができてから、急に私は責任を感じ、生活も緊張したと思う。制作にも一生懸命になったと思う。」と言っている。その後、長男英樹、次女ナナ子が誕生し、寛は3人の子どもに恵まれる。

寛夫妻と長女瑠美子

一躍花形作家として文壇へ

ここから寛の猛烈な執筆活動が始まった。「忠直卿行状記」のもとになった「暴君の心理」「悪魔の心理」を書き、「無名作家の日記」は新進作家としての寛を文壇に送り出したのである。

そして大正8年（1919年）「恩讐の彼方に」を発表した。それまで時事新報の記者の仕事をしながら、休みない作家活動を続けていたが、自信を得た寛は、2年半勤めた時事新報を退き、芥川龍之介とともに大阪毎日新聞の客員になった。

この大阪毎日新聞の夕刊小説に「藤十郎の恋」を書き、これが東京の歌舞伎座で大好評のうちに上演され、寛は新人作家として認められたのである。

また大阪毎日新聞に「真珠婦人」の連載をはじめた。これが「東京日日新聞」にも同時に連載され、圧倒的な人気になり、これより人気作家となった。

雑司ヶ谷邸と寛

一躍花形作家として文壇へ

流行作家と呼ばれ、時代の寵児として女性から熱狂的にモテた。加えて原稿料は文壇で最高額になり、原稿の注文は殺到するし、それに印税、上演料を加えると莫大な収入になった。当然社会的地位もあがり、寛は通俗作家への道を進むことになった。

これらは容姿などの悲観からも解放され、みじめな思いばかりの貧乏からの決別であった。

「文藝春秋」を創刊

書きたいものを書ける雑誌

作家になりたい若者がいる中、その多くは実際にそれだけで食べていくことはできなかった。そしていいものを書いても、書きたいものがあっても、編集者や出版社の望むものしか書けなかった。

寛は自分が流行作家になったことで、自分たちのための雑誌を、自分の手で作ろうと決心した。読者や編集者に気兼ねなく自由な気持ちで、書きたいものを書くことができる雑誌、それが「文藝春秋」だった。

文藝春秋草創期の人たち（後列左が寛）

文藝春秋創刊号

今も続く大人気雑誌に

この雑誌は当時としてはとても変わっていた。破格に安い定価で、随筆と、文壇の噂話、ゴシップにあふれていた。文壇の内側を知りたがる読者たちの要望にこたえ、文壇への興味をかきたて、親しみが持てる雑誌だった。編集後記には寛が雑誌に関して洗いざらい、しかも読者と対等に家族に語り掛けるように書いていた。創刊号はすでに人気作家であった芥川龍之介のコラム「侏儒の言葉」が巻頭を飾った。その後、川端康成や横光利一なども参加している。

またこの雑誌を作るにあたり、どれだけのお金がかかっているか、という収支の明細を公表した。それで、雑誌の定価が決して高くないこと、編集者が儲けてないことを発表した。このように読者に正直にすべて書くうえに斬新な面白さで、どんどん発行数が多くなっていった。

当時、創刊した同じ年の雑誌「中央公論」は1円。「新潮」は80銭だったので、「文藝春秋」の10銭がどれだけ破格に安い雑誌だったかがよくわかる。タバコが約6銭。銭湯が5銭。かけうどんが8～10銭という時代。寛はうどん1杯の金額の文芸誌を創刊したのだった。

そして「座談会」という形式は現在テレビや雑誌等どこでも行われているが、それをつくったのは寛である。ゲストを迎えて話を聞く。それを記事にした。これはジャーナリストとしての才覚である。第一回は徳富祖峰を招いて芥川龍之介、山本有三、菊池寛が話を聞いた。

「これから毎月、座談会を催すことになった。当代一流の人々を招待して話を聞こうというのである。我々が全然聴き手の立場になり、お客様に充分話をしてもらおうというのである。今月は、徳富祖峰氏に来ていただいた。徳富氏ならば座談会のコケラオトシとして申分ないと思う。」と書いてある。

後に株式会社文藝春秋社を設立した。現在も存在する。

芥川龍之介との関係

正反対の同級生から親友へ

寛と芥川龍之介の関係は一高時代からであるが、一高時代はお互いに反感のような感情があって仲がいいとは言えなかった。

芥川は都会育ちらしい眉目秀麗の美少年。一方、四国から来た田舎者で態度や風貌も粗野である寛とでは見た目も行動もまったく違ったからである。

しかし寛が京都へ行った後、一緒に第三次「新思潮」をやるようになって。江戸の文学や外国文学を話すうちに共通する興味と学識を認め合うようになった。

さらに親しくなるのは、寛が時事新報に入ってからである。当時芥川は横須賀の海軍機関学校で英語を教えており、芥川が上京して新橋に着くと、南鍋町（現・銀座）ある会社によく訪ねてきて、2人はコーヒーを飲みながら文芸談で盛り上がった。

菊池寛から見た芥川龍之介

「僕とは、趣味や性質も正反対で、又僕は芥川の趣味などに義理にも共鳴したような顔もせず、自分のやることで芥川の気に入らぬことも沢山あったことだろうが、しかし十年間一度も感情の阻隔を来たしたことはなかった。彼が僕を頼もしいと思っていたのは僕の現生的な生活力だろう。そういう一点一番欠けている彼は、僕を友達とすることをいささか力強く思ったに違いない。」

芥川龍之介から見た菊池寛

「自分は菊池寛と一しょにいて、気づまりを感じたことは一度もない。と同時に退屈した覚えも皆無である。…同時に兄貴と一しょにいるような心もちがする。こっちの善い所は勿論了解してくれるし、よしんば悪い所を出しても同情してくれそうな心もちがする。」

「彼のカルチュア（教養）は多方面で、しかもそれぞれに理解が行き届いているが、菊池が兄貴らしい心もちを起こさせるのは、主として彼の人間の出来上がっている結果だろうと思う。ではその人間とはどんなものだと云うと、一口に説明することは困難だが、苦労人と云う語の持っている一切の俗気を洗ってしまえば、まさに菊池は苦労人である。」

「菊池は生き方が何時も徹底している。中途半端なところにこだわっていない。彼自身の正しいと思うところを、ぐんぐん実行に移していく。その信念は合理的であると共に、必ず多量の人間味を含んでいる。そこを僕は尊敬している。」

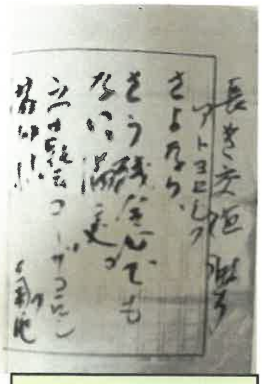
芥川龍之介との別れ

兄弟のような関係に

寛と芥川龍之介は親友を超えて、尊敬しあう兄弟のような関係になる。寛が最初の心臓発作を起こしたあと、芥川に遺書を書いている。また芥川も寛に遺書を託していた。

芥川龍之介は**自分の長男を「比呂志」**と、寛の呼び名（ひろし）と同じに命名するほどだった。

そして芥川が誘って、一緒に大阪毎日新聞に入社する。芥川は海軍の教師を辞め、寛は時事新報の新聞記者を辞めて、安定した時間と収入が得られ、精神的にゆっくり作家活動ができるゆとりができた。長崎へも旅行に行き「これは私にとっても芥川にとっても記念すべき旅行だった」と言っている。



寛から芥川へあてた遺書

芥川龍之介の自殺

芥川は昭和2年（1927年）7月、2度ほど文藝春秋社の寛を訪れた。しかし2度とも寛は留守だった。しばらく待たせてもらうといって、芥川は応接間で待ったが、寛は現れなかった。芥川が来たことも社員から伝えられていなかった上に、寛はそれほど忙しかったのである。それから数日後の7月25日、芥川は自殺した。35歳だった。

寛は号泣した。告別式で友人代表として弔辞を読んだ。

「友よ安らかに眠れ！ 君が夫人賢なればよく遺児を養ふに堪ゆ」

寛は、涙があふれ止まらなかった。「あの時会っていれば」という悔いが残ったがどうしようもなかった。

芥川と長崎への旅
一番左が寛、隣が芥川龍之介

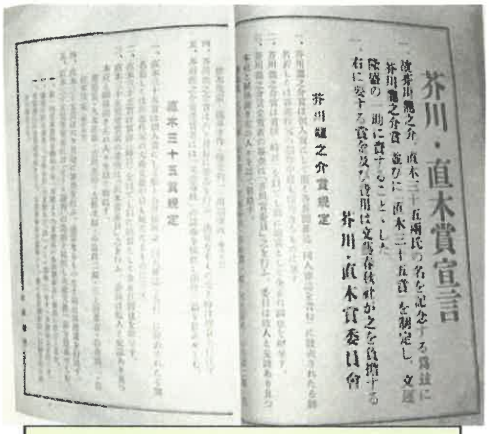
中国に行く芥川龍之介のために
上野に精養軒で開かれた送別会
前列左より久米正雄、芥川龍之介
一番右が寛

芥川賞・直木賞を設立

友人の死をきっかけに

身近な友人たちの死が続いた。特に直木三十五（なおきさんじゅうご）は常識をこえた奇行と鬼才の持ち主で、交友録で寛は「アテになるようでアテにならず、アテにならざる如くしてアテになる。此の頃、段々アテになってくる」と言った仲だった。大衆文学人気作家であった。直木が入院する日まで、寛と直木は碁をした。

寛は昭和10年（1935年）、芥川龍之介賞、直木三十五賞の制定を発表した。亡き友人の名を後世に残すだけでなく、才能ある新人や埋もれている作家にチャンスを与えたい。そういう寛の思いが込められている。



「文藝春秋」にて発表

芥川龍之介

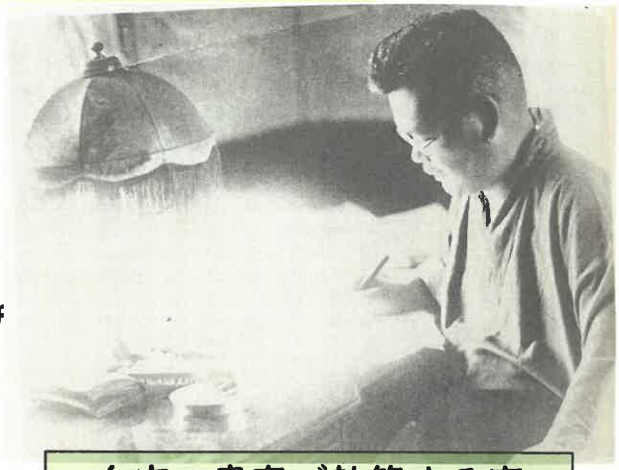
直木三十五

菊池寛賞も制定

昭和13年、先輩作家に敬意を表し、業績をたたえるため、45歳以下の作家や評論家が選考委員になり、46歳以上の作家を表彰する賞を制定した。

一時中断となるが昭和27年に復活した。佐佐木茂索の発想で、戦前は対象を作家に限ったのを広げて、演劇、出版、映画、文学、新聞の各分野で最も画期的な業績を挙げた人、または団体を対象にした。

文壇の大御所へ



自宅の書斎で執筆する寛

衆議院議員に立候補

日本で最初の普通選挙が実施された年に、寛は立候補した。惜しくも落選。寛の立候補、そして落選の結果に、様々の新聞が皮肉や冷笑し寛をからかった。

文藝春秋社を株式会社へ

この自分の個人経営でやってきた文藝春秋社を株式会社にした。のちに作家の佐佐木茂索に社務と経理を任せた。雑誌の売り上げは決して悪くないのに、会社は借金があり赤字だった。佐佐木は作家活動から完全に経営にまわり、内部調査をした。すると集金の多くを流用や着服していた。財政立て直しのため全社員給与3か月半減給処置を取った。佐佐木茂索の改革は功を奏し、根本的な整理が達成した。よく働き、よく遊ぶ文藝春秋社の再建がこの時正しくされたために、10周年記念をにぎやかに迎えることができた。社長の寛と、専務取締役に就任した佐佐木茂索は見事なコンビになった。

佐佐木茂索

作家の経済的保障と社会的信用の確立

寛は自分の築いた地位や経済力を、自分自身の利益や欲望を満たすためだけに使う、という考えはなかった。寛は自分を頼ってくる貧しい文学志望者や、困っている社員に対する個人的な援助はもとより、社会的意義を持った事業にも金銭的な投資を惜しまなかった。

明治時代は森鷗外や夏目漱石といった大文豪でも作家だけの収入では生活ができなかった。なぜなら出版社が最初の原稿を買い取ったときのお金しか残らなかったのである。印税制度などはなかった。

そして現在作家は芸術家であり文化人という認識があるが、当時は職業を小説家というと家も借りれないほど、社会的信用がなかった。

そこで寛はまず文壇改革をしていく。寛自身が幼いときからの貧しさから自由に才能が発揮できなかったので、まず経済的不安から作家救う方法を考えた。

そのため寛がつくったのが「文芸家協会」である。これは作家の経済的な保障をするものである。設立早々、内務大臣に「著作権法」について会談し、「脚本使用料」「作品の映画にともなう使用料」など大幅に変えた。「日本文芸家協会」の初代会長になり新たに組織され、現在にも引き継がれている。

文士部隊、戦線へ

近づく戦争

日本軍国化の波はますますその速さを増し、日中の戦いはいよいよ大陸深く進展していった。寛は「文藝春秋」の社員に召集令状が来ると、「必ず生きて帰って来いよ」と泣いたという。

漢口作戦に従軍
視察、取材（左から2番目）

戦線へそして慰問活動

昭和13年（1938年）内閣情報部より、文芸家協会会長の寛に、作家を動員して従軍するよう要請があった。22人の作家たちと共に大陸に向かった。いわゆる「文士部隊」である。

寛は普段から、国家が文学を認めないことに不満だったので、今回のように大々的に認められ、しかも自分を中心にに話を進めてくれたので、率先していくのを決めたのである。その後「文芸銃後運動」を始めた。「文芸銃後運動」というのは、昼間は作家たちが全国各地の陸海軍病院に慰問に行き、夜は講演をすることである。これは寛の予想を超える反響で、北は樺太から南は台湾まで、全国の都市をまわった。

吉川英治と
中国戦線視察旅行

大映の社長に

日映画会社「大映」の社長に就任する。そして国策映画作りにも協力する。

文芸家協会会長として中国長江戦線へ

公職追放そして急逝

敗戦そして文芸春秋社を解散

昭和20年（1945年）、日本は敗戦した。出版を続けようにも、用紙不足は深刻になり、さらに「金融緊急措置令」による預金封鎖などで、金融面でも苦しくなった。そしてついに昭和21年（1946年）文芸春秋社解散することになった。（その後佐佐木茂索が復活させる）

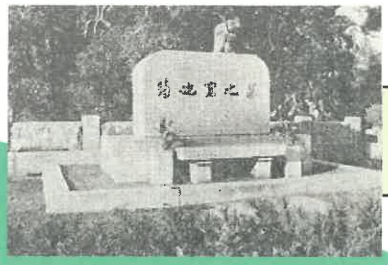
孫の貴美、夏樹と。
やることがなくなった寛はよく
孫の相手をした

公職追放の指令

そんな失意の寛に、GHQからの公職追放の指令がきた。日本の「侵略戦争」に「文芸春秋」が指導的立場を取ったというのがその理由だった。
「戦争になれば、国のために全力を尽くすのが国民の務めだ。いったい、僕のどこが悪いのだ」と寛は怒った。大映社長も辞任した。

狭心症で急逝

なんでもやりたいことをやってきた寛にとって、「何もするなという指令」は、寛に死ねと言っているのと同じことであった。
さらに昭和22年（1947年）に親友横光利一を失い、昭和23年（1948年）一緒に苦難を共にした元文芸春秋社専務鈴木氏亨が急逝した。
すっかり元気がなくなった寛は胃腸障害を起こす。数日の間、自宅療養していたが、回復し3月6日の夜、主治医や近親者を集めて全快祝いの宴をした。好物の寿司などを食べて2階の自分の書斎にあがって行った。そこで突然狭心症の発作を起こした。発作から死亡までわずか10分だった。
葬儀は3月12日、東京小石川の音羽護国寺にて行われた。文壇・財界・政界・その他各界の知名人や読者からなる参列者は約7000名におよび、戦後最大の葬儀と言われた。寛の幅広い活動と、愛される人柄を象徴するような盛大な葬儀だった。
「私は、させる才分なくして、文名を成し、一生を大過なく暮らしました。
多幸だったと思います。」



多摩霊園にある寛のお墓
碑文字は川端康成の書

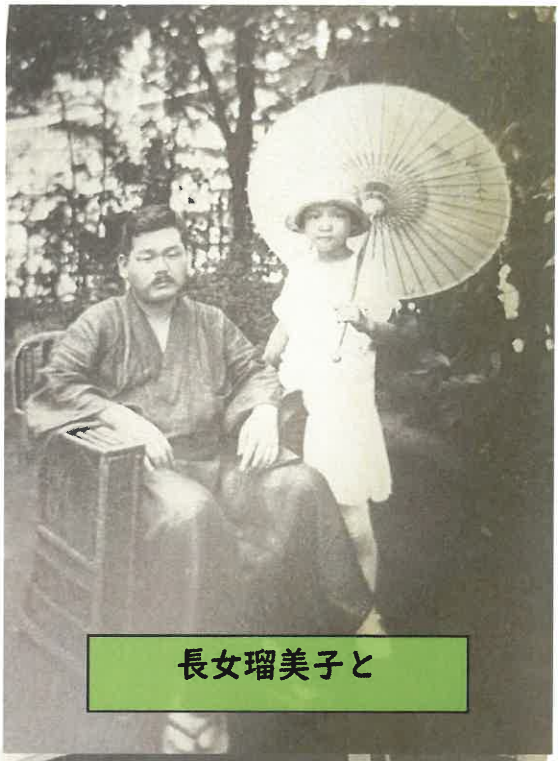
父親としての寛

やさしい父

子煩悩な寛は、仕事の合間を見ては子どもたちと遊んだ。ベーゴマ、まわり将棋、五目並べと真剣に、決して手を抜かずに相手をした。

また近所の子まで乗せて、当時めずらしかった自家用車で豊島園（遊園地）に連れて行っては、子どもが喜ぶのを見ていた。

長男英樹に文学をすすめるとか、進路について指示したことはない。英樹は東京大学工学部土木科に進んで、鹿島建設の技師となった。「父は完全な放任主義だった。僕ほど父を知らない人間はいないと思います。父の小説は何一つ読まず、死んでからやっと読むようになりました。」と語ったほどである。



長女瑠美子と

若いうちから苦労するな

若いうちに苦労をすると人間が卑屈になるからと、お小遣いをふんだんに与え、当時最高級といわれたレストランによく連れて行った。忙しい中でも毎週土曜日は家族サービスデーだった。

勉強しろと一度も言ったことがなく、自由奔放に育てた。貧しかった自分の経験をわが子には絶対にさせない、という思いが見える。

しかし付き合う芸者もいたし、愛人との間に子供もいた。妻は特に寛と別れる気もなかったという。

左から長男英樹、長女瑠美子
寛、次女ナナ子

怒った顔は一切見せず優しい父だった

ペットと寛

動物が大好き

寛の家には、常に1匹か2匹の犬がいた。寛は犬好きだった。大正13年からいろんな種類の犬を飼っている。犬の他にサルや小鳥を飼っていたこともある。

初めて飼った犬はブルテリアで、どんな犬にも喧嘩をしかけるような犬だったが、いつも負けていた。やっつけられて帰ってくれば、棒を持って応援に行ったことがある。

雑司ヶ谷邸に住んだ頃は、グレイハウンドやシェパード、マルチーズという子犬がいた。雨が降ると、2階の座敷の畳を上げて犬を家にいれた。2階で大きな2匹がじゃれたりすると1階にいる人はたまったものじゃない。廊下で放尿すると、階下へポタポタ落ちて、裁縫していた夫人が慌てて仕立物ごと避難したこともある。子供たちは犬好きではなかった。夫人が「けものののにおいで耐えられない」といっても取り合わなかった。それどころか、寛の書斎の本や万年筆をめちゃくちゃにかじられ、寛のベッドにまで入るようになった。それでも寛は嫌な顔をせず怒らなかった。そのくらい犬を自由に大切にしていた。

グレイハウンドの「ゼム」と

雑司ヶ谷の自宅にて
左から長男英樹、寛、次女ナナ子
白い犬はマルチーズの「チョビ」

スポーツと寛

スポーツ万能

寛は、もともとぽっちゃり体型で、一見運動が苦手そうに見えるが、意外に何でもできた。高松中学校1，2年生時代は野球で2番選手だったし、4，5年生になってからはテニスの選手だった。

当時高松中学校の野球部は相当強かったようで、慶応野球部が関西遠征に来るとき、一番に希望したのが高松中学校だったほどらしい。

東京に出てからも、様々スポーツを楽しんだ。ゴルフは苦手だったようだが、とにかく何でもやってみる性格だったようである。

↑南房総市の岩井海岸にて

←ゴルフを練習する寛

文春野球チーム
前列左から4番目が寛

卓球を楽しむ寛

勝負事と寛

趣味がいっぱい

寛は、釣り、将棋、相撲、ダンス、競馬、ポーカー、麻雀と何でも楽しんだ。

将棋をさす寛

将棋と競馬

寛の随筆「将棋」では、「将棋はとにかく愉快である」と始まり、将棋の極意と上達法をつづっている。将棋上達のコツは、自分より二枚強い人と対戦し、とにかく盤数をこなすことだそう。

また競馬は本を出版するほど大好きで、ついに馬主にまでなる。当時大学の初任給が50～60円の頃。馬券は1枚20円とても高価だった。そして所有馬「トキノチカラ」が天皇賞優勝。大馬主となる。

ダンスホールにて
寛の女好きは有名であった

麻雀

寛は、「日本麻雀連盟」の初代総裁になり、初めて国産牌「文藝春秋牌」の製造販売し、麻雀の国内普及に貢献した。

ただし大敗すると機嫌が悪くなり、黙りこんでしまうので、周囲から「口きかん」と呼ばれたとか。

好きなものにはとことん打ちこんで
一流になり、普及活動をするほどだった

代表作紹介

寛は「人生第一、芸術第二」という簡明率直な哲学を持ち、読者に奉仕するという職業意識に徹した作家である。普通の人によろこばれる、わかりやすい小説や戯曲を書いた。寛は書くテーマをみんなが関心を持つ、人間性の問題とした。そのため、ヒューマリズム、リアリズムの作家として、多くの読者を持った。

「父帰る」

愛人を作って妻と子供をおいて、借金残して貯金を持ち逃げしたどうしようもない父親が、20年ぶりに帰ってくる話。父が出て行ったあと、10歳だった長男が働いて、弟と妹を立派に育てた。弟はイケメン小学校教師になり、妹は美人でいい縁談の話があるようになった。そんな夕食どきにボロボロ老人（元イケメン）に変わり果てた父が帰ってくる。母も弟も妹もよろこんでいるが、父親の代わりをして苦労してきた長男は絶対に許さない。諦めて父が家を出たところで、長男は弟と父を探しに飛び出す。

上映された新富座

想像以上にダメ父なので、私なら絶対に許しません。帰ってきたときも反省すらしておらず、普通にお酒をつがそうとしています。だけど最後のシーンを見る限り、長男は許しています。そこが菊池寛の優しさや、そういうところが家族のつながりなのかな、と思いました。昔の書き方でお母さんを「おたあさん」、父親を「ておや」とあり、こんな言い方してたんだなと思いました。今もある「古新町」が出てきたり。「教科書さえ満足に買えないで、写本を持って行って友達にからかわれて泣いた」等、寛の経験も入っていました。この「父帰る」の舞台を見た芥川、久米、そして寛本人も、会場みんな泣いたそうです。

「父帰る」の舞台、長男賢一朗（右端）は市川猿之助

「恩讐の彼方に」

自分が仕える主人の愛人お弓と、つきあっている市九郎。主人にばれて殺されそうになったところを逆に殺してしまう。そこから二人は逃亡した。昼は茶屋、夜は客を殺して金品を盗む生活が続いたが、お弓のあまりの強欲さが嫌になって、お寺に逃げ込み出家する。了海となる。そして罪をつぐなう全国行脚に出る。豊前の「鎖渡し」という山越えの難所で人が毎年死ぬことを知る。懺悔としてこれを救おうと、断崖に杭を打って、洞門を掘り始める。どうせだめだと最初は笑っていた村の石工も協力し、遂に完成が見えてくる。

その頃殺した主人の息子・実之助が父の敵討ちにと、市九郎の元にやってくる。市九郎は素直に斬られることを望むが、石工にとめられ、開通するまで待つことになる。市九郎が掘り始めてから21年目、実之助が来て1年6ヵ月、ようやく洞門は開通する。

約束通り市九郎は実之助に自分を討たせようとするが、市九郎に心打たれた実之助は仇討ちの心を捨て、市九郎に縋り付いて号泣するのだった。

大分県の青の洞門

難しい言葉があったので、解説を見ながら読みました。それにしてもお弓、最低だしひどすぎます。ちょっと気持ち悪くなりました。そして市九郎は「禅海」という江戸時代の僧侶がモデルになっているそうです。禅海は危険な橋から民の命を守るため、後に青の洞門と呼ばれるトンネルを30年かけて開削した人物です。この「青の洞門」は、現在も大分県中津市に残っているそうなので、いつか見てみたいです。「恩讐の彼方に」とは「情けや恨みという感情を超えた先に」という意味だそうですが、その先は言い表せない感情で難しいです。父親を殺した人が良い人になっていたからといって、許すことができるのか。今の私には無理です。寛の作品は「言葉で表せない人間だからこその感情」が多いなあと思いました。

菊池寛記念館へ行こう

菊池寛記念館
香川県高松市昭和町
1−2−20
サンクリスタル3F

サンクリスタル高松3階の菊池寛記念館に行ってきました。（1，2階は高松市中央図書館）菊池寛の原稿や手紙がたくさんありました。上手とは言えない字を見て、身近に感じました。

寛が考案しためずらしい「K K」の紋の着物

寛の声も聞くことができました！思ったより高めでした。

本に載っていた将棋など実物がありました。↑本当に使っていたのだな…としみじみ。そして何度も本に出てきた寛の雑司ヶ谷邸の書斎が復元されたコーナーもありました。↓とてもモダンで素敵！

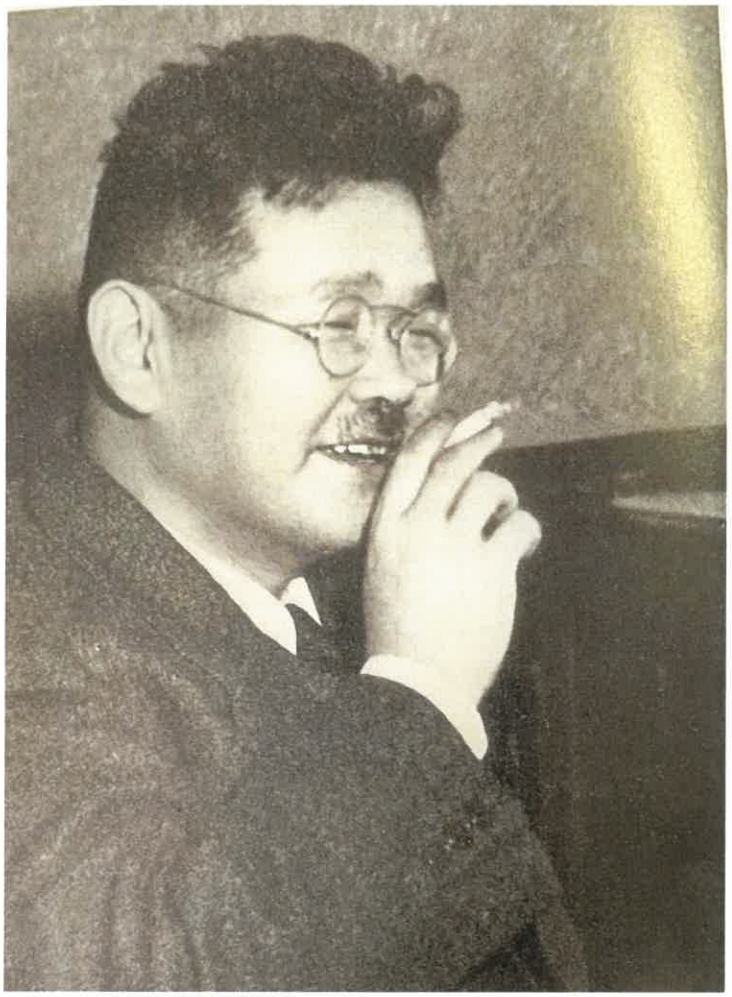
「芥川賞」「直木賞」「菊池寛賞」の展示コーナーは圧巻でした！そして受賞者がいない年もあることは知りませんでした。私がわかるのはお笑い芸人の又吉直樹さんでした。ズラーと並んで今まで続いているのを見ると、寛の功績がよくわかりました。そして「きくちかん新聞」という寛のことが子どもでもわかりやすい新聞を貰いました。裏には英語版の新聞になっていたり、夏休みの自由研究がしやすいような企画、その上パネルやプリントを用意してくれていたりと、高松市が誇る偉大な文化人である寛に対する愛情を感じた展示でした。

ゆかりの地へ

菊池寛記念館でいただいた「ブラリきくちかんマップ」を利用させていただきそのまま歩いて写みました。。ありがとうございました。

菊池寛記念館へ行ったあと、ゆかりの地を歩いてみました。高松市中央公園周辺でした。菊池寛の生家は、驚くほど高松市の中心地にありました。「番町は武士の居住区域だった」そうなので、菊池寛は本当に立派な家柄の出身だということがよくわかりました。また百舌坂が、あの栗林トンネルへの坂道だったとは（紫色線）。通っていた高松中学校（場所は現在の高松工芸高校）から一直線！もちろん生家からも近いです。やはり実地調査は大切です。あと家から高松中学校（場所は現在の高松工芸高校）の間に（緑色線）、あの図書館があったはずなので、きっと現在の高松高校周辺にあったと思われます。　確かに菊池寛は、ここ高松市で生きていた！

まとめ　菊池寛とは



- 香川県高松市出身の明治から昭和にかけて活躍した文壇の大御所
- 「父帰る」「真珠夫人」など多くの作品を残した
- 「生活第一、芸術第二」と、まずは生活を守ることを信条とした
- 文芸春秋社設立、「芥川賞」「直木賞」「菊池寛賞」の設立、著作権擁護、作家の地位の向上に尽力した実業家でもある
- スポーツに将棋や麻雀に競馬、と多趣味な一面もあった
- 多くの人たちに愛される、面倒見のいい優しい人だった

感　想

菊池寛は両親にとても似ていると思いました。父親の藩儒家系の学習面でとことん頑張れる力。そして母親の豪商だった家系の実業家だったところ。そして芝居が大好きだったところです。それぞれのいいところを受け継いで、作家であり実業家になったのかなと思いました。

貧しかったのは知っていたけれど、優秀だったのでスムーズにエリートコースに進んだと思っていたら、意外にも学校を転々としていて、かなり遠回りをしていました。けれど、その遠回りの4年間があったからこそ、一高のかけがえのない同級生となる人たちと出会えたわけです。

これから私は志望校を決めるのですが、このことはすごく考えさせられました。なぜなら学力の問題、勉強が難しくてついていけないからこの学校が合わない、ではなく「校風が合わない」ということがあるなんて、考えたこともなかったからです。これはテストの点数だけでなく、自分の性格や将来を考え、どのような学校かをよく調べてから、志望校を決めていかなくてはいけないな、と思いました。そして今後、自分の人生の中で遠回りになることがあったとしても、菊池寛のように諦めずに、自分が思う道に進んでいこうと思いました。

あと、「菊池寛は素直な人」だと私は思いました。「変な顔」と言われて嫌だったとか、貧乏が嫌とか、万引きした過去のこととか、友達に陰で悪口を言われて嫌だったとか、普通に書いてあることに驚きました。もし私だったら、いいところを見せたいし、自分の悪事なんて絶対に知られたくないからです。そして菊池寛のすごいところは、そんな嫌だったことをヒントにして、作品にしているところです。どんな経験も無駄ではなかった、菊池寛が無駄にしなかった、ということだと思います。だから今も続く文芸春秋を創刊したことや著作権保護に尽力したこと、芥川賞直木賞につながっていったと思います。

さらに具体的に学校生活のこと、先生とのこと、成績のこと、友達とのこと、恋愛のこと、友人の恋愛のことまで書いてありました。

素直＝嘘をつかない＝信頼される＝愛される

菊池寛が愛される理由はこういうことだと思います。

私も今、中学生になってから、順位に一喜一憂する成績、学校生活、部活。色々悩みはあります。でも私には笑い合える友達がいて、尊敬できる先輩や先生がいて、大好きな家族がいます。菊池寛から学んだ、どんな経験も役に立つ、役に立たせる！ と自分を信じて、素直に、自分の道を進んでいきたいです。

あとがき

私がこの「高松市図書館を使った調べる学習コンクール」に初めて応募したのが小学校2年生のときでした。初めてもらった大きな賞状。初めての表彰式。初めてのことばかりでドキドキしたのを覚えています。そのことがあまりに嬉しくて、毎年夏休み前には「今年は何について調べよう」とワクワクしていました。毎年応募していると、図書館の人に名前も覚えてもらえていたのも、すごく嬉しかったです。「いつも頑張ってくれてありがとうね」とも言ってくれて、そういうすべてが励みになって毎年頑張ってこれました。

中学生になると、勉強に部活、委員会活動、生徒会活動と、急に忙しくなりました。夏休みも部活があり、週末も練習や大会で、正直本を読む時間、体力がなくなっていました。だからもう応募するのをやめよう、と思いました。とにかく時間がかかることがわかっているからです。でも本当にこれでいいのか？とモヤモヤする自分もいました。
それで悩んだ結果、「今年で最後にしよう、だから全力で取り組もう」と決断しました。

まず時短のために、高松市図書館のホームページからインターネットで借りたい本を予約し、取り置きが完了メールが届いたら、まとめて親に受け取ってきてもらいました。そしてとにかく少しずつでも読んで（寝落ちすることが多々あった）気になったところに紙を挟んで、パソコンでまとめました。ネット予約ができるシステム、そしてパソコンでまとめてOKなのも今年チャレンジできた理由です。

そしてテーマを「菊池寛」に選んで本当に良かったと思いました。菊池寛と私の共通点が2つわかったからです。高松市出身だということと、図書館が大好きだということです。

もちろん私は菊池寛ほど図書館の本を読んだわけでも、毎日通ったわけでもありません。でも同じくらい好きだと思っています。私は赤ちゃんである0歳のころから高松市中央図書館には通っていたそうです。小さい子のコーナーがあって、手遊びをしてくれたり、紙芝居を読み聞かせしてくれたりとイベントがあって、楽しんでいたと聞きました。そしてハイハイができるようになると、自分で本を選んでいたそうです。その後小学生になると、学校に移動図書館が来てくれていました。あのバスの中が図書館になっているのが楽しくて、毎月ワクワクでした。

このように振り返ってみると、私が図書館を好きになったのは、赤ちゃんから楽しめるようなイベントをしてくれていたり、ネット予約や移動図書館のように借りやすいようにしてくれていたり、と図書館が身近に楽しめるような環境をつくってくれていたからなのだな、と気付きました。そして今もこの高松市図書館を使った調べる学習コンクールがあるから、楽しみながら頑張ってこれました。本当にありがとうございました。

自分が選んで借りてきた本を、夜お布団の中で読んでもらうあの時間。「あと10分で寝る時間」や「どうぞのいす」「そらまめくんのおうち」「がまくんとかえるくん」「こんがらがっち」「エルマーのぼうけん」1冊の約束が、結局何冊にもなるあの時間。楽しかったです。私がいつかお母さんになったら、同じように図書館に行って、借りてきた本をベッドの中で、電気を薄暗くして一緒に読むと思います。今から楽しみです。

参考文献

番号	書名	著者名	出版社名	図書館名
1	芥川龍之介全集　第九巻	芥川　龍之介	岩波書店	高松市中央図書館
2	芥川追想	石割　透編	岩波文庫	高松市中央図書館
3	菊池寛の仕事	井上　ひさし	文藝春秋	高松市中央図書館
4	川端康成全集　第二十九巻作家と作品	川端　康成	新潮社	高松市中央図書館
5	菊池寛と大映	菊池　夏樹	白水社	高松市中央図書館
6	菊池寛急逝の夜	菊池　夏樹	白水社	高松市中央図書館
7	マスク　スペイン風邪をめぐる小説集	菊池　寛	文春文庫	高松市中央図書館
8	菊池寛全集第二十三巻	菊池　寛	文藝春秋	高松市中央図書館
9	菊池寛全集第二十一巻	菊池　寛	文藝春秋	高松市中央図書館
10	菊池寛　話の屑籠と半自叙伝	菊池　寛	文藝春秋	高松市中央図書館
11	菊池寛　短編三十三と半自叙伝	菊池　寛	文藝春秋	高松市中央図書館
12	菊池寛のあそび心	菊池　寛・菊池　直樹	ぶんか社文庫	高松市中央図書館
13	輝ける讃岐人２	公益財団法人山陽放送 学術文化スポーツ振興財団	吉備人出版	高松市中央図書館
14	菊池寛	小林　和子	勉誠出版	高松市中央図書館
15	作家の犬	コロナブックス編集者	平凡社	高松市中央図書館
16	随筆衣食住	志賀　直哉	三月書房	高松市中央図書館
17	映画人・菊池寛	志村　三代子	藤原書店	高松市中央図書館
18	郷土に輝く人々	青少年育成香川県民会議事務局	青少年育成香川県民会議	高松市中央図書館
19	菊池寛　文学作品集中学校版	高松市教育委員会	高松市教育委員会	高松市中央図書館
20	菊池寛　児童文学作品集小学校版	高松市教育委員会	高松市教育委員会	高松市中央図書館
21	菊池寛伝	高松市立図書館	高松市立図書館	高松市中央図書館
22	菊池寛	福田　清人・小久保　武	清水書院	高松市中央図書館
23	形影　菊池寛と佐佐木茂索	松本　清張	文藝春秋	高松市中央図書館
24	口きかん　わが心の菊池寛	矢崎　泰久	飛鳥新社	高松市中央図書館

参考ＵＲＬ

番号	タイトル	ＵＲＬ
1	菊池寛記念館	https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/kikuchikan/index.html
2	高松市公式ホームページもっと高松おうちでまなぶ菊池寛	https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/kikuchikan/walk/index.html
3	文藝春秋を知る	https://www.bunshun.co.jp/recruit/about/
4	いらすとや	https://www.irasutoya.com/
5	Gakkenキッズネット	https://kids.gakken.co.jp/jiyuu/

作品の裏面に貼付してください。

「第12回 高松市 図書館を使った調べる学習コンクール」 作品応募カード	学校用受付番号（学校記入欄） ※個人提出の場合は記載不要です	作品番号（事務局記入欄） 中・夢・牟 国・香	受付No.

部　門	（□に✔を入れてください。） □小学校1・2年生の部　□小学校3・4年生の部 □小学校5・6年の部　☑中学生の部
タイトル	ー菊池寛生誕135年記念ー 菊池寛とは どのような人物だったのか
ふりがな 氏　名	みかみ　りら 三上　りら ※作成者が複数の場合は全員の名前を記載してください。
学　校	高松市立 玉藻　小学校／(中学校)　[2]年生

切り取り線